詩編８編の黙想：神賛美における人間の卑小さと尊厳（2020 年４月

神賛美の間で：この詩は「主、わたしたちの主よ、あなたの御名は、いかに力強く全地に満ちていることでしょう」という神賛美で始まり、同じ言葉「主、わたしたちの主よ、あなたの御名は、いかに力強く全地に満ちていることでしょう」で終わっています。宗教改革者ジャン・カルヴァンが作成した『ジュネーヴ信仰問答』において、問いの第一は「人生の主な目的は何ですか」です。答えは「神を知ることです」となっています。そして問いの６では「では神についての真の正しい認識とは何ですか」とあり、その答えは「神をあがめる目的で神を知ることであります」となっています。人間のなすべきことは、神を賛美することです。私たちの日々の営み、私たちの悲しみと喜びに彩られた人生はこの神賛美の「間」に起こることを黙想してみよう。口語訳では「いかに尊いことか」と翻訳された「アッディール」というヘブライ語はまさに、力強いという意味と「高貴である」という両方の意味を含んでいる素晴らしい言葉です

全能の創造主の偉大さ：私たちの神賛美は、被造世界に働いている神の創造のみ業に目を向けるとき、インスピレーションを与えられる。イスラエルにおいて、「天」は目に見えない被造世界を意味しており、地球を取り囲む大気が天と呼ばれたり、あるいは、大気の上の天使たちや神が住まう所が天と呼ばれたりする。目に見える地上の世界においてだけでなく、天の目に見えない世界においても神の栄光が輝いているといいます。３節で「私は仰ぐ」と言って、詩人は一人、静かな夜、月と星を見つめながら神の偉大さ、力強さを思う。どうして、太陽は出てこないのだろうか？エジプトの太陽礼拝を避けるためだろうか？「あなたの指の業」、「配置された」と言われている通り、月の満ち欠けや天における正確な軌道、そして、星座の配置は驚くべき秩序です。それもほんの神の「指の業」に過ぎないとは。

人の卑小さ：その目を偉大な被造世界と神から自分自身に向けてみよう。私たちは自分の小ささを痛感するに違いない。３節は「幼子、乳飲み子の口によって、ほめたたえられています」と言います。他者を信頼することを知っている幼児、嬰児の片言の神賛美は、詩人や信仰者に敵対し、恨みを晴らすような、攻撃的で賢いこの世の者たちを黙らせるに十分です。イエス様はマタイ 11：25 でこの言葉を引用されましたね。そして詩人は問います。「人は何者なので、これにみ心をとめられるのですか」「人の子は何者なので、これをかえりみられるのですか」。「人」を意味するヘブライ語は４つありますがここで、「人間」（エノシュ）は、傷つきやすい、朽ちゆく存在であることを意味し、「人の子」つまり「アダムの子」とは土くれからでき、土に戻っていくものを意味しています。偉大な神がなぜこのような弱く、小さく、はかない人を愛し、恵みを与えてくれるか？「心に留める」とはヘブライ語聖書の鍵語「ザーコル」で、「記憶する」「覚える」という意味です。「顧みる」と翻訳された「ティフェケドゥヌー」は「訪問する」ことを意味し、失われたもの、欠けた者を捜し求めて下さることです。全世界の創造主が私たちを「訪問してくれる」とはなんという驚きでしょう。

人の尊厳と役割・責任：神は、人を「神よりただ少し低く造られた」。「造られた」（ティハセデフー）は、もとは、「人を少しく（メアット）咎め、辱める」（ハセド）という意味もあるようです。人は自分の命と共に、神から与えられている使命（ミッション）を自覚せねばなりません。今日、原発の問題性、生態系の危機に直面して、環境世界と自分自身を酷使してきたこと、熱くなりすぎたことを反省せねばならないでしょう。人間は神より小さいものであるということ、そして、あくまでも神の僕として神に仕え、神を賛美するなかで、この世界を治める使命と責任があるということを覚え、人間がその偉大さに夢中になり、陶酔しないように、この詩篇は再び神賛美で終わっています。